



仏の慈悲に 誘われて生きる

禅昌寺住職 横山 正賢

修証義第三章 授戒入位
第十四節

此の帰依仏法僧の功德、必ず感応道交するとき成就するなり、設い天上人間地獄鬼畜なりと雖も感応道交すれば必ず帰依し奉るなり、已に帰依し奉るが如きは、生生世世在在処処に增長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三帰の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりということ、世尊已に証明します、衆生当に信受すべし。

前章の帰依三宝の功德は、どのような形で現れるかということであります。

功德というのは広辞苑によりますと、すぐれた特質・善い行いと説かれてありますが、子供の頃からよく両親から「徳を積むとか、功德のお陰」とか折々によく聞かされてきましたが、私は特別な行為ではなく、日常の帰依三宝を拠り所とした、誠実な生き方が素直に結果として現れる姿だと考えております。

感応道交というのは、感は仏の姿無き姿、声なき声に牽きよせられる気持ち、応はその牽きよせられる慈悲（愛）に答えていく営みが仏に抱かれて、我と仏が一体となって現れる姿を道交と受けとめております。

「設い天上人間地獄鬼畜なりと雖も」というのは、人間の迷いは三界六道「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上」を生まれ変わり死に変わりして、流転転生しながら繰り返している中にあることを略して申されているのです。然りと雖も感応道交すれば必ず帰依し奉るなり、と言われるのは。

人間の迷いが生死流転する中で、三宝帰依の功德に感応道交すれば、生死流転する迷いが変じてその功德は。「時代や処を問わずその功德は繁栄し、功德は功德を生んで、仏の理想郷を具現し、三宝帰依の功德が計り知れない不可思議な智慧や力となって現れることを、お釈迦様は証明されていることを疑ってはならない」と諭されているのです。

禅昌寺を訪れる皆さんが異口同音におっしゃることは「何時もきれいに掃除されている、門に入るなり心が洗われる」と言ってくたさいます。私はこのように皆さんから言われてこそお寺としての存在があることを自負しております。禅昌寺が荘厳で静寂な境内を維持できている裏には何かがあるかを、ご理解いただきたいのです。

禅の修行では最初に掃除の功德をうるさく仕込まれます。それは掃除の汚れを清めるという行為と禅の修行で心の執着をはらうということと共通するからでしょう。境内の掃除を始め境内の静寂の護持に奉仕する職員の方々が、「禅昌寺の本尊様の聖域に奉仕させていただく、お参りにこられる皆様を清々しくお迎えする」と無心に「奉仕下さるか

らだ」と日頃より感謝いたしているところです。

住職がお寺の職員を採用した折りに作業の分担を指示はしましたが、作業の仕方については何の注文も指示も致しておりません、従事される職員の方々は皆さん我がこととして、ご自身の納得のいくように務めておられます。

職員の方々が「三宝に帰依する」という特別な意識を持って、与えられた仕事に従事されているとは思いませんが、感応道交という姿があるとすれば禅昌寺という静寂な聖域の護持に携わっている職員の方々のお寺へ奉仕される姿そのものと申したいのです。

お寺の職員として奉仕下さる方々のみならず、お寺の行事・講演会・コンサート・その他その度に、朝早くから遅くまで諸々の作業に、無心に我がこととして奉仕下さる方々が在ってこそ、お寺の面目が保てていることをしみじみ思うのであります。

無心の奉仕が何のこだわりもなく自然体で営まれる方々の生き様を見ておますと、その方の個人的特性ではなく、生い立ちや育った環境までが滲み出ているようなものを感じるのです。御両親始めその方のご家庭に伝わる環境から育まれているものを感じるのです。

これも「生生世世在在処処に增長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり」と諭される姿の一端と受けとめております。

毎月お墓参りにくる人は沢山ありますが、正面の石段を登って山門をくぐって本堂正面でご本尊様にお祈りしてお墓へお参りする方は少ないように思います。

帰依三宝感応道交の功德の庭で心身共に洗われるお寺参りをして下さるよう願っています。

光
を
伝
え
た
人
々

——よき人の歩かれた
あとかたを尋ねて——



今ここに 生命をかける

愛知専門尼僧堂 堂長 青山俊董師



うらかな春の日差し降りそそぐ中を、お釈迦さまは何人かのお弟子さんと共に、野中の道を歩いておられた。冬の眠りから醒めた草々が、とりどりの花を咲かせている丘に立たれたお釈迦さまは足もとを指さしておっしゃった。

「ここにお寺を建てるよいなね」

すると、お弟子さんの中に仲間入りをしてお伴をしていた帝釈天（お釈迦さまに帰依し仏法護持の神となつた天帝）が、一本の草を手折り、お釈迦さまの指さされたところに挿し、「お寺が建ちました」と申し上げた。お釈迦さまは満足げにニツコリとほほえまれ、何事もなかったかのようにまた歩き出された。

『従容録』第四則「世尊指地」の本則は、この春の一日のほんの一瞬の出来事を、一幅の絵のように描き出しているが、いったい何を語りかけようとしているのであろうか。

まずは「此の処、よろしく梵刹を建つべし」のお釈迦さまの一句に参じてみよう。

『法華経』神力品に次のような言葉がある。「もしは園中においても、もしは林中においても、もしは樹下においても、もしは僧房においても、もしは白衣の舎にても、もしは殿堂にありても、もしは山谷曠野にても、是の中に皆まさに塔を起てて供養すべし。ゆえはいかん。まさに知るべし。是の処は即ちこれ道場なり」

要するに、「いつ、どこにあつても、『今、ここ』に生命をかける。それよりほかにわが人生の建立はない」ということではなからうか。

「人生は、今今今の数珠つなぎ」と、布巾に刺子で縫って贈ってくれたお婆ちゃんがあったが、どの一刻も「今」でない時はなく、「ここ」

でない場所はない。食事をしている「今、ここ」もあろう。お手洗いで用をたしている「今、ここ」もあろう。台所に立っている「今、ここ」もあろう。喧嘩をしたり、愚痴をこぼしたり「今、ここ」もあろう。どの一瞬も、一度去れば再び帰ってこない、つまりやりなおしのきかない、しかも誰にも代ってもらえない私の生命の歩みなのである。

少くとも一日二十四時間、分に換算して一四四〇分という「今、ここ」がすべての人に全く平等に与えられている。その中には喜びの一瞬も、悲しみの一瞬も、逃げ出したい一瞬もあろう。逃げず追わず、ふすらず、のほせあがらず、おちこみもせず、いかなる「今、ここ」に対しても生きる姿勢をくずさず前向きに積極的に取り組むことができたときそこに塔が建つたといえるのである。光かがやくような雑巾がけができたとき、皆がよろこんでくれるような料理ができたとき、病氣や失敗を財産に切りかえることができたとき、そこに寺を建てることのできたといえるのである。

お釈迦さまが「ここ」に寺を建てるよいな」とおっしゃり、帝釈天が「寺が建ちました」と答え、また、「神力品」で「是の中に皆まさに塔を起てて供養すべし」と語りかける。いわゆるの寺でも塔でもなく、置かれた場所ですすべきことをなし得たとき、野っ原であろうとそこ道が行ぜられたとき、そこに大殿堂か建ち、塔を起てて供養したといえるのである。

逆にいかに壮麗な大伽藍であろうと、その中でつまらない争い事や、人間の我愛、我欲の満足を追つてのかけひきが行われていたのでは、

荒れ果てた原野にすぎないというのである。「示衆」には「随処に主となり、縁に遇うて宗に即する底」とある。いついかなるときも、「やらされる」という従業員的な根性ではなく、積極的に「主人公」という姿勢で取り組み、しかもそのあり方は、わがまま気ままな私の思い通りにするのではなく、天地の道理にかなった（宗に即する）あり方で勤めよ、というのである。

一つの春をいただいて それぞれの花を咲かせる

冬が去り春がよみがえり、地球温暖化も手伝ってか、日だまりには福寿草や犬ふぐりが咲き出した。雪もしめりを含んだ春雪となり窓辺には贈られてきた盆梅が、すでに春の香りをただよわせている。

『従容録』第四則の「世尊指地」の頌は、この春の景色を借りて、すべて存在するものの価値を、そしてどう生きたらよいかを説いている。

まず初めに「百草頭上無辺の春、手に信せ拈じ来たり、用い得て親しし」の七言二句が登場する。

地上にあるすべてのものの上に、全く平等に一つの春が訪れ、その春の息吹につつまれ、春のエネルギをいただいで、梅や辛夷は丈高く、しかも春に先がけて咲き、すみれやタンポポは地にはりつくようになして、しかも春なかに咲くというのである。具体的な花の開き方に高下あり遅速はあろうとも、全く平

等に春の命、春の働きをいただいて、それぞれの花を咲かせているというのが、「百草頭上無辺の春」の心である。

いったい何をいおうとしているのか。春そのものは具体的姿を持たない。つまり、無限定のものであるからこそいつでも、どこでも、という在り方で存在できる。しかしながら決まった姿を持たないものを絵に描くことはできない。春が梅を咲かせ、すみれやタンポポを咲かせるという具体的姿、働きとなつて現れたとき、初めて絵として描くことができる。梅やすみれを描くという形で、無限定の春を描くことができる。

仏の御命、御働きは決まった姿を持たないからこそ、天地いっばいにみちみち、いつでもどこでもという在り方で働きかけつづけていて下さる。その無限定の仏の御命、御働きを、私は私という姿形をもつた人間として具体的にいただき、その働きをいただいて、今は筆を動かしている。

弟子のAは、等しく天地いっばいの仏の御命、御働きをいただいて、台所の当番という配役で料理に取り組み、Bは境内の除雪という配役をいただき、Cは買い物係りというお役をいただいて車を走らせている。

天地いっばいの仏の御命、御働きを一身にいただいでいることにおいては全く平等（無辺の春）であり、その平等の命をいただいでこの今この働き、配役は皆違ふ（百草頭）。

草木に高下遅速の違いはあっても、等しく春の姿であるように、人の姿や、具体的配役にいろいろあろうと、等しく仏の御命、御働

きとしての書きものであり、台所仕事であり除雪なのだから、折り好みせず、手あたり次第、どんなことであろうと、いただいた仕事を、配役を、大切に心こめて勤めあげよ、というのが、「手に信せ拈じ来たり用い得て親しし」の第二句目の心といえよう。

ところが、凡夫はそこにつまらないモノサシを持ち出し、この仕事はいいがあの仕事はつまらない。あの人は器量がいいが私は悪くて損をしている、とか。あらゆる時点で背比べをし、おごつてみたり落ち込んだりする。相田みつをさんの詩に、

トマトがトマトで あるかぎり

それはほんもの

トマトをメロンに みせようとするから

にせものとなる。

というのがある。トマトよりメロンのほうが上等と勝手に序列をつくり、自分はトマトなんだという劣等感と、けれどもメロンに見せたいというわが身かわいい思いから背のびをする。意識過剰が邪魔をしてトマトの働かせもできないという、みじめな結果を招きかねない。

トマトはトマトで百点万点、メロンはメロンで百点万点。人間のモノサシ、自分ののからいをかなぐり捨て、私が私に落ちつく。天地からの授かりの姿に落ちつき、悠々とおのれの花を咲かせよ、の教え、それが最後の「触処生涯、分に随つて足る。未だ嫌わず、伎倆の人に如かざることを」の結びの二句である。

◆道心趣味の会◆

短歌

研ぎ汁を植木にやりてときおかず
ひそと来にけり雀の一群れ

沿線に立葵たちあざみつづくこの路は

兵士を運んだ過去ある宇品線

東区 矢野 淑子

俳句

秋の溪魚を離るる魚の影

白よりもなをしろき白蓮の花

麒麟にもなを高さ空ありにけり

廿日市市 伊藤 順二郎

望の月名演奏に笑み給ふ

一徹に生きて悔いなし鱗雲

東区戸坂 青笹 俊枝

◆行事報告◆(七月～十月)

●お盆前諸堂大掃除

七月二十六日(日) 午前十時より

ご家族それぞれの五十数名のご奉仕
がありました。参加者には特製
うちわが贈られました。

●孟蘭盆依法要

八月六日(木) 午前十時半より

孟蘭盆会施食供養法要・法話
今年は昨年になましてご家族ずれ
の参詣者で賑わった。

●青山俊董老師講演会

九月三十日(土)

午前午後通して毎度の事ながら多数
の聴講者があつた。遠くは下関・岡
山からの参加者もありました。
一般聴講者に比べて檀信徒の参加が
少ないのは寂しい。

●第九回「Tsukimi in 寺」

十月三日(土)

恒例のエリザベト音楽大学教授
大代啓一先生のフルートと、今年
は箏曲家沢口一恵先生の琴・ピアノ
藤田雅先生のジョイントコンサート
でした。

丁度中秋の名月と重なり、身心と
もに洗われた一夜となりました。
参加者は三百八十人程でした。



第9回「Tsukimi in 寺」コンサート(平成21年10月3日)

●第二回西国三十三観音霊場巡り

十月二十九日(土)～三十日(金)

二十三人の参加者で第四番札所
槇尾寺から第十番札所三室戸寺
まで参拝しました。



西国三十三観音霊場巡り(平成21年10月30日 第9番興福寺にて)

◆行事案内◆(十一月～一月)

●お正月前諸堂大掃除

十二月六日(日) 午後一時より

お子さんお孫さんとご一緒にご
参加下さい。掃除後希望者によ
り忘年会(会費千円)。

●臘八摂心坐禅会

十二月一日(火)(朝から)

八日(火)(朝まで)

午前六時より六時四十分まで
午後七時より八時三十分まで
(年内の坐禅会は八日の早朝坐禅を
もつてお休みします。)

●修正会(年頭坐禅会)

平成二十二年元旦午前八時より

●新年ご祈禱法要

平成二十二年元旦 午前十時より

檀信徒皆様の一年の無病息災を祈
願する法要です、お揃いでお参り
下さい。お参りのお方には祈禱札

を差し上げます。(古いお札をご
持参下さい)

※お寺の寺務は一月五日より通常に
戻ります。

●日曜坐禅会

毎月第一日曜日午前九時より

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日の
予定 午後一時から

お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつ
もりでご参加下さい。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習

第四金曜日午前九時より講師を招い
て練習 昼まで

◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講
師の都合により変更する場合もあ
ります。初めて参加される方は、
お寺に電話にてご確認下さい。

■毎週定例行事

●暁天坐禅会 月曜日～金曜日

毎朝午前五時半～六時十分まで

●水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半

●婦人坐禅会 毎週金曜日

午後一時より坐禅・茶話会終了三時
(第一金曜日のみ坐禅の後、写経・茶話会)

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構です。
お寄せ下さい。